

エーゲ海地方-晩秋の Foça と Şirince

飯尾彰敏
イスタンブール市都市交通計画調査団

1985年、ヨーロッパを一人旅しているときに南ヨーロッパで度々トルコへ行くことを薦められたがその時は叶わなかった。YHが安宿で旅行者が教えてくれたのだろう、当時のメモには「ロードス島>クシャダス>セルチュク>エフェソス」とある。Kusadasi, Selçuk, Ephesus はトルコのエーゲ海沿岸の観光地であり、Kusadasi にはクルーズ船が停泊する。当時、ロードス島からトルコへ入るルートは、Kusadasi ではなく、Bodrum 経由の意味だったのだろう。Kusadasi からはギリシャでも Samos 島だ。



それから 20 数年、忘れていたわけではないが、トルコのエーゲ海という言葉が思い出された。2007年11月、休暇を利用してイズミール近郊にあるエーゲ海地方の漁村(Foça)と山村(Şirince)を訪ねたので紹介してみたい。晩秋という季節柄、両村とも静寂がとてもし合う村だった。本来ならばバスか鉄道でイズミールまで行って見たかったが時間が許さないので往復ともトルコ航空の国内線を利用した。

オンラインチェックイン-トルコ航空国内線

航空券の購入は旅行代理店へ行くものと思っていたが、web を見たらオンラインで購入ができるので試してみた。イスタンブール-イズミール間はトルコ航空が一日 10 数便を運航している。余談だが、その他、オヌル航空、アトラスジェット、フライエアー、ペガサス航空が運航し、これに加えて Sun Express という外国路線を運行する会社が国内線に、さらに、イズミール航空が参入予定と過当競争の時代になっている。(既に運行しているようだ。)

トルコ航空のウェブから希望のフライトを選択して画面の説明に沿って進めていくと予約購入ができ、さらにチェックインまでオンラインで可能との説明がある。それに早く予約すれば廉価なシートが手に入るようだ。

実際、預け入れ荷物がなければオンラインチェックインをしておいてそれから空港へ向かって遅くはない。もしくは、空港のオンラインチェックイン機で購入したクレジットカードを使って容易にチェックインができる。このサービスには感動した。多分、日本の国内線もそうなのだろう。

普段着の漁村リゾート“Foça”



それから 20 数年、忘れていたわけではないが、トルコのエーゲ海という言葉が思い出された。

2007年11月、休暇を利用してイズミール近郊にあるエーゲ海地方の漁村(Foça)と山村(Şirince)を訪ねたので紹介してみたい。晩秋という季節柄、両村とも静寂がとてもし合う村だった。本来ならばバスか鉄道でイズミールまで行って見たかったが時間が許さないので往復ともトルコ航空の国内線を利用した。

トルコに来るまで Foça を知っていたわけではないが、エーゲ海を見たいとイズミール出身の知人にリクエストしたら Çeşme より静かなここを推薦された。実際ここは人口 3.6 万人の小さな漁

村、イズミール市民が週末に出かけてくるような距離(70km)にある普段着かつ静寂さが似合う漁村リゾートだ。時に外国人観光客も訪れるようだが少ない。到着した夜は天候が大荒れで一時は止めようかと思ったが強行、翌日は台風一過のような青空が広がった。

Foça とは、アザラシ(Seal)という意味、この周辺に生息する Mediterranean Monk Seal に由来する。Foça は、Yeni Foça (New Foça、20km 北)と区別して Eski Foça (Old Foça) と呼ばれる。Eski Foça は二つの湾から成り、大きな湾 Büyükdeniz (the greater sea) と小さな湾 Küçükdeniz (the smaller sea) があり、その中間に中世の城壁が残っている。



Eski Foça と Yeni Foça の間は風光明媚な海岸や洞窟が多く、また、豊かな動植物相から自然保護地区に指定されている。季節によるが島々を巡るボートツアーがある。また、Foça (以下 Eski Foça を Foça とする。) は歴史的な石造住宅を主とした特徴から町並み保全地区に指定され、広範囲にわたり新たな建築規制の網がかけられている。よって Foça は自然の豊かさと歴史的な町並みが融合するプチ観光漁村なのである。



Foça は半日もあれば徒歩で一周できてしまうサイズだが人々の生活を見ていると飽きない。小さな湾の奥にはカフェが立ち並び、ここで朝食を取りながら漁師や人々の様

子を眺めていると絵になるなとステールカメラを持ち込まなかったことが悔やまれた。観光地的なお店も少なくはないがそれよりも Foça の生活感の強いのかカフェなどの数を除いてさほど観光地の印象はなかった。シーズンにもよるのだろう、晩秋から冬にかけての今がもっとも静寂な Foça を楽しめるのではないだろうか。

ここへ来たらシーフードを食べない手はない。ペンションで聞いた市場の横にある Sahil Restaurant でディナーを取った。本日の魚を見せてもらったが、Sea Bream,



Sole, Sea Bass, Barbunya (写真), Shrimp とイスタンブールと概ね同じ種類だった。その中で、Barbunya (和名ヒライトヨリ、Threadfin) を選んだ。これは私の好きな魚でアラビア語では“スルタン・イブラヒム”という。初めて食べたのはトルコ国境に近いシリアのラタキアという町の郊外にある地中海に面したレストラン“Abou Sahid”だった。当日嵐だったのでこの日に獲れたかどうか疑問だったが他に目に付くものもなく Barbunya 全て、といっても 700g だったが、を注文した。料理方法はから揚げだ(写真)。これにレモンを絞って食べ

る。身が小さいがなかなかの美味である。

先のとおり、翌日は台風一過のような澄み切った青空が広がっていた。しかし、住民たちの顔は重い、どうしてかと尋ねたところ昨晚の嵐でかなりの船舶が沈み、魚網にも影響が出、栈橋が一部崩壊したとのことだ。実際にはプレジャーボートが多く、所々で沈んでいるボートを見かけ、ウッドデッキ(栈橋)は波を打っており、一部完全に崩壊していた。その時は、町長陣頭指揮の元、ブルドーザーで撤去作業が行われていた。

(<http://picasaweb.google.com/iio.tokyo/Foça2>)

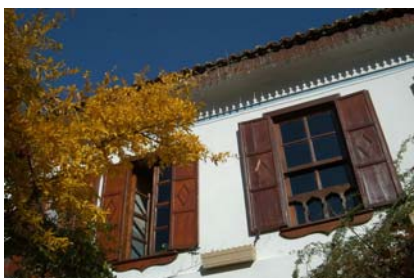
山村滞在“Şirince”



Foça よりずっと名が知れているオスマン・トルコ時代にギリシャ系住民が住んだ山村リゾート地、Şirince、エーゲ海クルーズ船が立ち寄る Kusadasi から近いこともあり、そこをベースに Ephesus や Selcuk、そして Şirince までが観光ルートになっている。村には大型バスの駐車場があった。Şirince は Selcuk から東部へ 9km の丘の上に位置する、果樹園に囲まれた山村である。

Şirince の歴史は 15 世紀まで遡り、開放されたギリシャ系奴隷がこの地に住み着いたことに始まり、7 つの僧院が位置するこの周辺でオスマン・トルコ時代ギリシャ系が経済的に活躍した。19 世紀以降多くの赤瓦屋根と石造スタッコ仕上げ民家が建設され現在も使われている。

しかし、当時と現在では住民が異なる。これは、1923 年のトルコ独立後の 1924 年にギリシャ系住民は現在のギリシャの Salonica (テッサロニキ) に住むトルコ系住民と交換が行われたからだ。彼らは果樹を栽培することに長け、さらに各種フルーツワインをも醸造した。これら自家製ワインは冷やしてアペリティフ(食前酒)として飲むと美味しい。これがこの村の名産ともなっている。石造りの民家はそのまま使用され現在に至っている。1926 年、イズミール県知事は、それまでの Cirkince (ugliness) から現在の名である Şirince (pleasantness) へ変更した。



村へ足を踏み入れるとワインやオリーブオイル、手工芸品を並べている店が連なっている。如何にも観光地へ来たという印象だった。バスから降りてくる多くの観光客で通りは混雑していた。Şirince の本来の姿は、これらのバスが去った後だろう。やはりここでは民家を改造したペンションで一夜を過ごすべきであろう。



ペンションに荷物を置いてから村の散策に出かけること

にした。石畳の細い道は車では走れないほど狭く急峻だ。自動二輪車がせいぜいで、薪を積んだカートを引きいていた。直ぐ傍に村の生活がある。途中から犬が案内役を買って出てくれた。さらに丘の上を目指して石畳の道を歩く。頂上付近からの眺めは斜面に張り付く石造スタッコ仕上げの民家が一望できる。一休みして村の中心まで下り、今度は向かい側の尾根を目指して歩いてみる。案内してくれた犬は土産物屋の犬でそこで別れた。

僧院への矢印があり行ってみる。住民が移転しているのでギリシャ正教徒はいないだろうが、僧院は残り、朽ちていたのを修復したようだ。僧院自体はもうその機能を終えているが中庭は絶好の眺望ポイント、そして、テーブルがありカフェになっていた。観光客が訪れ思い思いのポーズを取って写真を撮っていた。僧院の周りには参道ならぬ地元産品の露天が出ていた。



マス・ツーリズムに慣れた山村観光地なのか、物価は決して安くなく、ドライ・イチジクを買ったが、イズミールのスーパーと値段は変わらなかった。安いという期待値が高すぎたのだろう。ペンションのオーナーに話を聞いたが、トルコは物価の安い観光地としてヨーロッパや北米から観光客が訪れていたが、近年のトルコリラ高で外国人観光客が激減しているところぼしていた。確かにここは、既にマス・ツーリズムの洗礼を受けてしまい、物価は安くはないようだった。ペンションにしても Foça と比較して高止まりしているようだ。私は外国人なので US ドルで支払ったが、トルコリラ建てだと現行の為替レートでは USD 支払いのが 2 割ほどお得感があった。



う。ペンションのオーナーに話を聞いたが、トルコは物価の安い観光地としてヨーロッパや北米から観光客が訪れていたが、近年のトルコリラ高で外国人観光客が激減しているところぼしていた。確かにここは、既にマス・ツーリズムの洗礼を受けてしまい、物価は安くはないようだった。ペンションにしても Foça と比較して高止まりしているようだ。私は外国人なので US ドルで支払ったが、トルコリラ建てだと現行の為替レートでは USD 支払いのが 2 割ほどお得感があった。

Şirince はある程度地域振興的に作られた観光地の印象だ。石造りの民家が残り残っておりそれらをペンションなどの宿泊施設にして民泊させるというヨーロッパの農村ツーリズムに似ている。そして、Ephesus や Selcuk、Kusadasi など質の高い観光資源との連携で成長してきたのだろうが、ここに来て正念場を迎えている。村自体は非常に素朴でフォトジェニックなのだ



が。

Foça、Şirince とも日本ではほとんど知られていない。地球の歩き方に Şirince について数行の説明がある程度だ。今回、自然体で現地情報に耳を傾けそれに乗ってみた、百聞は一見にしかず、普段着的な週末旅行をエーゲ海沿岸で過ごすことができたし、20 数年前の薦めも確認できた。このようなプチ週末旅行ができたのは国内交通機関が発

達し時間が読めたことが可能にした要因だろう。

訪れるものの常として Foça はこれ以上変わってほしくないとか、Sirince はマスツーリズムから距離を置くべきだとか、いささか意見はあるが、トルコの魅力に少しでも触れられたことはまことに光栄だ。スチールカメラを担いでその瞬間を切り取っておきたい衝動に駆られる。その他の写真は下記サイトに保存してある。(2007年11月現在)

Foça と Sirince ギャラリー:

<http://picasaweb.google.com/iio.tokyo/Foca>

<http://picasaweb.google.com/iio.tokyo/Foca2>

<http://picasaweb.google.com/iio.tokyo/SirinceTurkey>

<http://picasaweb.google.com/iio.tokyo/Sirince2>